

螢(ほたる)

令和2年8月第1週放送

八月に入り、お盆の季節を迎えました。夏至を過ぎてからは日を追って夕方は薄暗くなります。梅雨入りから夏にかけての野外では、螢の光を見かけることも今では珍しくなりましたが、正に日本の夏の風物詩といった風情です。

「夏は夜。月の頃はさらなり、闇もなほ、螢のおほく飛びちがひたる。」

古く平安時代に随筆『枕草子』に清少納言が記した風景は、江戸の元禄時代になると「^{ほたるみ}螢見」という風流な舟遊びを流行させました。

松尾芭蕉の句に、

「ほたる見や 船頭酔て おぼつかな」

とあります。やがてこの「螢見」という遊びは多くの人びとに広まり、^{うちわ}団扇で螢を追って虫籠に集める「螢狩り」という遊びも浸透してゆきました。

螢独特の光り方や動きは、私たちの心象風景に重ね合わせることで擬人化されます、例えば光が意のままにならずゆらゆら動くさまから、自身或いは亡き人の魂に^{なぞら}準えたる。そうした想像を膨らませ、心の情操を豊かなものにするに大きな働きがあったとも言えるでしょう。

そんな、私たち人間が大事にしている螢ですが、自然環境の微妙なつり合いの上に辛うじて存在していることを忘れてはなりません。きれいで適度に温かい温度の水、餌となるカワニナ

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

がいる、水流が穏やかで暗く静かな環境。

生息地では、水路の掃除に草刈り、植樹など、多くの手間をかけることで環境が保たれている事を知っておくべきでしょう。

大本山永平寺を開かれた道元禅師も螢を歌に詠んでいます、

「山の端の ほのめくよひの 月影に 光も うすく とぶ螢かな」

僅かな月の光に照らされた遠い山の稜線。即ち教えのすがたに向かって、自身が歩むべき足元のさとの道を今一度明るく照らそうとしている。

人間も螢も今、同じ時間を精一杯生きています。命の輝きの尊さに今一度想いを致したいものです。

— 終 —